

呪われた王

入 治 彦

奨励者紹介〔いり・はるひこ〕

日本キリスト教団京都教会牧師

京都刑務所教誨師

日本キリスト教団京都教区総会議長

見よ、わたしの僕は栄える。
はるかに高く上げられ、あがめられる。
かつて多くの人をおののかせたあなたの姿のように
彼の姿は損なわれ、人とは見えず
もはや人の子の面影はない。
それほどに、彼は多くの民を驚かせる。
彼を見て、王たちも口を閉ざす。
だれも物語らなかったことを見
一度も聞かされなかったことを悟ったからだ。

わたしたちの聞いたことを、誰が信じえようか。
主は御腕の力を誰に示されたことがあろうか。
乾いた地に埋もれた根から生え出た若枝のように
この人は主の前に育った。
見るべき面影はなく
輝かしい風格も、好ましい容姿もない。
彼は軽蔑され、人々に見捨てられ
多くの痛みを負い、病を知っている。
彼はわたしたちに顔を隠し
わたしたちは彼を軽蔑し、無視していた。
彼が担ったのはわたしたちの病
彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに
わたしたちは思っていた
神の手にかかり、打たれたから
彼は苦しんでいるのだ、と。
彼が刺し貫かれたのは
わたしたちの背きのためであり
彼が打ち碎かれたのは

わたしたちの咎のためであった。
彼の受けた懲らしめによって
わたしたちに平和が与えられ
彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。
わたしたちは羊の群れ
道を誤り、それぞれの方角に向かって行った。
そのわたしたちの罪をすべて
主は彼に負わせられた。
苦役を課せられて、かがみ込み
彼は口を開かなかった。
屠り場に引かれる小羊のように
毛を切る者の前に物を言わない羊のように
彼は口を開かなかった。

(イザヤ書 52章13節—53章7節)

食べてすぐに寝ると牛になる？

私は小学生の頃、今と違ってとても痩せていて小さい方でしたので、食べることがしんどく、食事をしたら疲れて横になる癖がありました。母親からよく「食べてすぐに寝ると牛になる」と言われてきました。でも、牛にならず今でも一応人間をやっています。私の先輩が同じことをお母さんから言われ「じゃ、うちにいるあの牛は誰がなったの？」と答えたそうです。テレビのコマーシャル、ソフトバンクのCMを見ていたら、犬になってしまったお父さんもいるようです。「夜、笛を吹くと蛇が出る」というものもありますが、これなどは隣近所に迷惑になるからそれをたしなめるために使われた言葉でありましょう。

それはともかくとして、こういった物事の因果関係に興味をもつことは、人間としてごく自然な、また誰しももっている探究心でありましょう。聖書にも俗に原因物語というものがあります。たとえば、今見ている虹はどうしてできたのか、創世記では、ノアの大洪水の後、神が人間との和解のしるしとして、空に虹を創ったという言い方をしています。人間がどうやってできたのか、ということでは、神が土の塵から人の形を創りそれに息を吹き入れたことによって、人間が生まれたと記しています。科学的にみるならば、おかしな話ですが、神話的意味の世界ではうなづけることです。人間がもともと塵のようにはかなく、塵から生まれて塵に還るべき存在ということをおぼえさせるからです。

応報思想

先ほど読んでいただいた苦難の僕(しもべ)の歌は、イザヤ書の40章から55章の中に出てくるものです。第二イザヤの特徴はいくつかあげられますが、その中の一つに応報思想、因果応報の形がよく見いだせると言います。たとえば、42章には「この方にわたしたちも罪を犯した。彼らは主の道に歩もうとせずその教えに聞き従おうとしなかった。主は燃える怒りを注ぎ出し 激しい戦いを挑まれた」とあります。また43章には「あなたの始祖は罪を犯し あなたを導く者らもわたしに背いた。それゆえ、わたしは聖所の司

らを汚し ヤコブを絶滅に、イスラエルを汚辱にまかせた」というように。イスラエルがバビロニアに強制連行された原因を探れば、それは、イスラエルがヤハウェの神を信じず、他の偶像の神々を拝んだ罪の結果なのだとすることをあらわしていたのです。

バビロン捕囚

バビロニアに捕虜として連れて行かれたイスラエルの人々は、確かに非常に悲惨な状況の中にありました。詩編137編には「バビロンの流れのほとりに座り シオンを思って、わたしたちは泣いた。豎琴は、ほとりの柳の木々に掛けた。わたしたちを捕囚にした民が 歌をうたえと言うから わたしたちを嘲る民が、楽しもうとして『歌って聞かせよ、シオンの歌を』と言うから」と、エレジーにその悲しみが歌われています。彼らは自分たちが預言者たちの忠告に耳を傾けず、神に背き、その結果神に見捨てられ、罰せられ、滅ぼされたのだという実感に悩まされていたのです。

イザヤの預言

ところが第二イザヤという人は、こういう人たちに向かって、力強く捕虜の状態からの解放を語っていったのです。もし捕虜の状態が、神からの罰であるとするならば、ひるがえって捕虜からの解放は、文字どおり神によってイスラエルの罪がゆるされたことの証明になります。これは、イスラエルの人々にとって大変説得力をもって迫りました。なぜならこのイザヤの預言が語られた当時、バビロンに対して新興勢力として強大なペルシャが台頭しつつあったからです。第二イザヤは、イスラエルをバビロンから救う救い主は、ペルシャの王、キュロス、クロスであると語ったのです。イザヤはキュロスについて44章28節で「わたしの牧者 わたしの望みを成就させる者」と言い、45章1節では「主が油を注がれた人キュロスについて主はこう言われる。わたしは彼の右の手を固く取り 国々を彼に従わせ、王たちの武装を解かせる」と、キュロスについて、油を注がれた者、メシア、救い主とさえ言っています。

捕囚からの釈放

そして、第二イザヤのこの預言は的中し、紀元前539年には、キュロス王に率いられた、より大国のペルシャがバビロンを倒してしまいました。その結果、イスラエルの人々は60年にわたる捕虜の生活を強いられたバビロニアから解放され、帰国の許可が出たのです。イスラエルの人々は、焼跡のエルサレムに帰って、今度こそは神の律法をしっかりと守って、神殿を再建しようという希望をもって、帰国の途につきました。この頃のイスラエルの人々の気持ちを反映しているのが詩編126編です。「涙と共に種を蒔く人は 喜びの歌と共に刈り入れる。種の袋を背負い、泣きながら出て行った人は束ねた穂を背負い 喜びの歌をうたいながら帰ってくる」。バビロニアから解放されて、イスラエルを再建していく喜びに満ちているではありませんか。

人々の疑念

けれども、一方でイスラエルの人々は、それまで神に対する疑い、疑念がありました。それは自分たちがバビロン捕囚のような屈辱に遭うのは、イスラエルの神ヤハウェが、バビロニアの神マルドゥクに負けたの

ではないかという疑いです。「主の手が短くて救えないのではない」という言葉にあらわされた神ヤハウエへの不信です。しかし、そのような神に対しての疑いは、ペルシャの王キュロスによる捕囚からの解放、エルサレムへの帰国の喜びによって解消されたことでしょう。やはり、ヤハウエの神はバビロンを撃ち破るような強い軍事力を司る神だったのだと。捕囚からの解放という喜ばしい歴史的な結果を見て、その原因を探る時、やはり我々の神ヤハウエは、バビロニアの神マルドゥクよりも強かったのだと。これによって、最後は何と言っても、力の強い者が勝つのだと、キュロス万歳、ヤハウエ万歳と叫んで胸を張って帰国の途につく光景が想像されます。「勝てば官軍」ではありませんが、イスラエルが直接勝ったわけではありませんが、敗北による捕囚から他国が敵国を占領したことによる解放によって、全くの挫折から、今度は一気に常勝気運に沸き立ったのです。

苦難の僕(しもべ)

ところがそのような歓喜の中で、第二イザヤという預言者は、一人皆と全く違うところを見つめていました。イザヤは自らの預言の的中によって、賞賛を受けヒロイズムに陥るところか、逆に自分の預言が間違っていたことを大胆に言いあらわしたのです。そこで歌われたのが、イザヤ書52章、53章の「苦難の僕(しもべ)の歌」でした。彼は救い主を「ペルシャの王、キュロス」に見てきたことを撤回し、まさにイスラエルを回復する者は「苦難の僕(しもべ)」以外の何者でもないと言い上げたではありませんか。

「見るべき面影はなく 輝かしい風格も、好ましい容姿もない。彼は軽蔑され、人々に見捨てられ 多くの痛みを負い、病を知っている。彼はわたしたちに顔を隠し わたしたちは彼を軽蔑し、無視していた」。僕(しもべ)の姿はこのようだったと言います。それは、強力な軍隊を率いて、バビロンを破り、囚われのイスラエルの人々を解放し、帰国の命令を出した華々しい栄光の姿に満ち溢れたキュロスとは似ても似つかわしくない姿でした。この僕(しもべ)のみじめな風貌に、端から見れば、まさしく因果応報的に考えれば、親の因果が子に報いならぬ、まさしくこの人には神の罰がくだったとしか思えない。この人がこんなにみじめなのは、前世が悪かったとか、この人の罪深さに対して、神の罰があたったのだという姿です。

彼の受けた傷によって

にもかかわらず、イザヤは歌い続けます。彼がこんなにみじめなのは、彼が罪を犯したからではない。親の因果が子に報いたのでもない、神が罰を与えたからでもない。そうではなくて、彼がこんなに苦しみを味わっているのは、彼自身の罪などではなくて、ましてや自業自得などでもない。実は彼のことをあざ笑っている者たち、彼を迫害してきた者たちのために、彼こそがその罪を担って苦しみあえいでいるがゆえの姿だと歌うのです。

「彼が担ったのはわたしたちの病 彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに わたしたちは思っていた 神の手にかかり、打たれたから 彼は苦しんでいるのだ、と。彼が刺し貫かれたのは わたしたちの背きのためであり 彼が打ち砕かれたのは わたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによって わたしたちに平和が与えられ 彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた」。

ここにおきまして、ふつうの応報的な考え方はくつがえされているではありませんか。彼の醜さは彼のせいじゃない。彼をあざ笑っているこちら自身の罪の醜さそのものなのだ。ここにおいて見えてくることは、

人がふつう避けて通る苦難の道、要領が悪いから、馬鹿な苦勞をするのだと見えるところにこそ、実に積極的な意味があり、だれ知らぬ中で、葬り去られるような僕（しもべ）、奴隸的なわざの中にこそ、世界を支える力があるのだということです。

不思議な交換

さて、イザヤ書53章4節の「彼が担ったのはわたしたちの病 彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに」という時の担うという言葉は、ナーサーという言葉ですが、これは詩篇121篇（口語訳）の「わたしは山におかって目をあげる」という時と同じ言葉が用いられています。ですから、言い換えるならば彼は我々の病をもちあげるといふうにも訳せます。そればかりか、このことは、イザヤ書52章13節の最初に出て参ります「見よ、わたしの僕は栄える。はるかに高くあげられ、あがめられる」にあげられるものとも同じ言葉です。こちらは、ニッサーという言葉でナーサーの受け身の形です。であるならば、この僕（しもべ）が神によって高く挙げられる、栄えるということの内実は、この僕（しもべ）が人の病を担う、背負うからだということと言えましょう。彼が栄えるのは、彼が何人もより優れた力をもっているからでもなく、彼が人より強い肉体をもっているからでもなく、ただただ、彼が私たちの罪、病を背負いきったがゆえに、栄えに入ることができたのだということです。彼の苦しみは、決して自業自得などではなかった。彼は裏切られてもゆるし、愛されなくても愛し抜き、徹頭徹尾、隣人の苦しみ、弱さ、痛みを担ったからです。罪を犯し続けてもゆるし続け、愛し抜き、立ち直ることを期待し続けてくれる人、それが苦難の僕（しもべ）なのです。ここにルターという不思議な交換があります。

「私が棄てた女」

高校1年生の頃でした。2年上の先輩で神学部に行くことになった方が、卒業真近な頃、遠藤周作さんの「私が棄てた女」の劇を卒業記念にしたいので、出演してくれと頼まれ、応援したことがありました。映画では、小林トシ江さんや浅丘ルリ子さんなどが出演していたそうです。私は、芸人の「ヒロシ」がしゃべる時いつも流れていた「ガラスの部屋」という映画のテーマソングがかかると、この劇のバックに使われていたのを思い出します。「Che vuole questa musica stasera, (歌) ヒロシです」(原曲: ペーポー・ガリアルディ)。この曲を聞くと、あの「私が棄てた女」を思い出してしまいます。演劇部の数人に物好きの何人かが加わって、この劇をしたことがありました。

無垢な存在の重さ

主人公は、森田ミツという世間に疎い娘で、吉岡という男と知り合い2度目のデートの時、裏通りの旅館で関係もちます。その後、吉岡は別の女性に熱をあげ結婚。二人の結婚式が近づいた時、ミツは体に変調を来し、ハンセン病の疑いで御殿場の病院に入院することになります。しかし、ハンセン病でないことが分かり、退院します。その後、当時出会った修道女の働く病院で手伝いをするようになりました。入院中の子どもたちの世話を献身的にし、看病のため徹夜をするようなこともありました。しかしクリスマスの前に、病院でとれた卵を御殿場の町に売りに行く途中、トラックにはねられて亡くなってしまうのです。修道女が吉岡宛てに送ってきた手紙には、亡くなる前にたった一言「さいなら、吉岡さん」と言ったと書いてあ

りました。失ってはじめて分かる、無垢の存在の重さと言いましょか、自分が棄てたような人に逆に支えられていたのかということに気づかされる、という小説でした。そんなことを思いながら、この劇に参加していたように思います。

傷つく者がまた癒す

ギリシャのデルフィ神殿、アポロンの神託には「傷つく者が、また癒す」という言葉があります。傷を負った者が、正に人の傷を癒すものになれるのだということです。世間一般では強い者が弱い者を助けるのはごく当たり前のことですが、真理はむしろその逆で、聖なる弱さが人を救うと言えるであります。震災の応援に行き逆にな被災者に励まされて帰ってきたという人もありますし、病院のお見舞いに行き患者さんから励まされて帰ってきたという話もよく聞きますし、私たちのしばしば経験してきた事柄であります。

ある牧師は、言いました。「家に鬼子が一人いる家庭は、幸せだと思いなさい。その子が家の膿を吸い出してくれているのだから」。苦難の僕（しもべ）とはまさにこのような形の中に収斂しているとも言えます。旧約聖書において、苦難の僕（しもべ）とは、イスラエルを指すとも言いますが、新約聖書から読む時、それはイエスを指し示していると言えます。

呪われた王

クリスマスに用いられるクランツもリースも、もともとはイエスのかぶらされた茨の冠をあらわしています。金冠をかぶる王ではなくて、茨の冠、荊冠（けいかん）をかぶる王、王であって王でない、十字架という玉座にはりつけにされた苦難の僕（しもべ）、呪われた王、その方が私たちの罪を背負われたがゆえの傷をもった冠です。その傷によって人の罪がゆるされ、分かたれた人々に和解がもたらされるのです。「呪われた王」とは、実は、ステンドグラス職人から絵描きになったジョルジュ・ルオーが描いたキリスト像のタイトルでした。彼の描く王、踊り子、道化師は皆、彼の描くキリスト像とよく似ていました。

私が同志社大学のある混声合唱団に入っていた時、1年上の先輩がこんなことを言っていました。「皆さんは、私にいつも感謝してください。私という下手くそがいるので、皆さんはいつも優越感をもって、自信をもって歌えるからです」と。この先輩は30歳そこそこで亡くなってしまいました。今となってはつらく、きつい話でもあります。

全く変わり果てた姿をとられ、十字架上に釘付けにされた苦難の僕（しもべ）、呪われ、笑われた主イエスのたどられたその足跡をたどりつつ、私たちもまた自らの弱さ、愚かさを通して、神の御栄えをあらわし、人に希望を与えていきたいものです。